

# 修学旅行に行ってきました(鹿児島・熊本)

# 六中だより



文責 宮川 英樹

十二月一日〜三日に修学旅行で鹿児島(知覧特攻平和会館、平川動物園、維新ふるさと館等)、熊本(旧東海大、万田坑、グリーンランド等)へ行ってきました。生徒たちは、しっかり時間やルールを守り、これまでの学校生活での学びを、学校外での行動に生かすことができました。また、生徒同士のつながり強くなりました。



万田坑



知覧特攻平和会館



旧東海大学



仙巖園

## 震災遺構「旧東海大学阿蘇キャンパス」を訪れて ～あいさつが命を守る～

修学旅行の二日目に旧東海大学阿蘇キャンパスで熊本地震について学びました。そこには、地表に現れた断層や被害を受けた校舎が保存してありました。そして、ボランティアガイドの方が、当時の様子を丁寧に説明してくださいました。

本校の女子班を担当されたガイドさんは、被災された学生さんとの関わりが深い方で、いくつかエピソードを話してくださいました。

その中で「地域の方々へあいさつをすることが自分の命を守るにつながる」という話がありました。それは、次のような内容でした。

ある女子学生さんは、一回目の地震の後、「必ず余震が来るはずだ」と避難に備えて準備をする時に、昔使った携帯電話をフル充電させておいたそうです。そして、四月十六日深夜の本震が発生。寝ていたその学生さんは、ベッドがトランポリンのようになり、飛ばされてベッドとテーブルの間に落ち、そこに天井が落ちてきて、停電となり真っ暗になりました。そこで、充電しておいた携帯のライトで照らし、脱出できない状況であることが分かったら、携帯のアラームを鳴らし続けたそうです。誰かが助けに来てくれた時に大きな声を出せるよう、体力を温存していた時に大きな声を出せるよう、体力を温存していたというのでした。そこへ救助に来られた方が、アラームの音に気付いた声をかけ、その声に大声で応じることで、助け出されたそうです。その学生さんは、日頃から近所の方々や挨拶を交わしていたことで、近所の人も「ここに学生さんがいるはず」と助けに来られたということでした。

このような経験から、「皆さんが地域のひとと挨拶を交わすことは『この子はあそこの家の子』』『〇〇さんの子ども』などと地域の方に覚えてもらったら、皆さんに何か起こった時に保護者に早く連絡ができたたり、助けに来てくれたり、という事につながると、つまり、皆さんの命を守る事につながる」というお話をされました。



### あとがき

八〇年前の十二月八日に、日本はアメリカとの戦争に向かっていきました。

先日、修学旅行で、私たちは知覧特攻平和会館に行ってきました。

そこでは、外国の方も熱心に見ておられました。生徒たちも、語り部の方の話を聞いたり、隊員が残された手紙を読んだりして学習しました。

知覧から片道分の燃料と爆弾を積んで沖繩へ飛び立たれた隊員の多くは、十七歳から二〇代前半の方で、展示してある手紙のほとんどは両親宛てに書かれたものでした。「家族のため、国のために戦える自分は幸せだから、戦うか悲しまないでほしい」という内容が多くありました。

その中に、自分の子供に書かれた手紙を二つ見つけました。二つの手紙には、どちらも「自分の好きなことを一生懸命やってほしい」ということが書いてありました。

特攻に行かれた隊員の方々は、本当はもっと生きてやりたいことが沢山あったのだからというものが、その手紙から強く伝わってきました。

私自身、しっかり生きていこうと改めて思いました。